

「家庭学」試論：「子女の愛」編

家庭の子どもの社会化機能と子女の愛

—統一思想による親学作成に向けて—

末吉重人 2009年8月22日記

はじめに

家庭学を定義するとすれば、「家庭を再建することによって現代社会が抱える様々な問題を解決することを目指す家庭に関する研究体系」であると考えられる。直ちに想起される現代社会が抱える問題とは、子どもの社会化に関する問題がある。子どもの社会化とは、子どもを経済的・精神的に自立させること、つまり一人前の大人にすることだが、現代家庭は子どもの社会化をうまく行えないケースが増えており、その結果、少年犯罪の低年齢化と多様化、耳目を驚かすような突飛な事件、引きこもりやニートなどが増加していると考えられる。

また少子化や高齢化問題も一種の家族問題として捉えられる。少子化は国の社会経済的生産能力を低下させ、また高齢化は老人のケア問題など社会全体の負担を増加させる。今のところ、こうした問題は社会的に対応することが強調され、家族による支援の必要性が軽視されている。しかし家族機能が強化され、それが社会的支援とうまくマッチすれば社会全体としての負担が軽減されることは明らかである。

ごく最近になって、社会福祉の分野でも公助（国家による支援）、共助（地域による支援）、自助（家族または自分の努力）という三段階の支援のパターンが示され、家族の支援機能の見直しが始まってはいる。その狙いが社会保障・医療にかかる国家の負担の軽減にあることは言うまでもない。

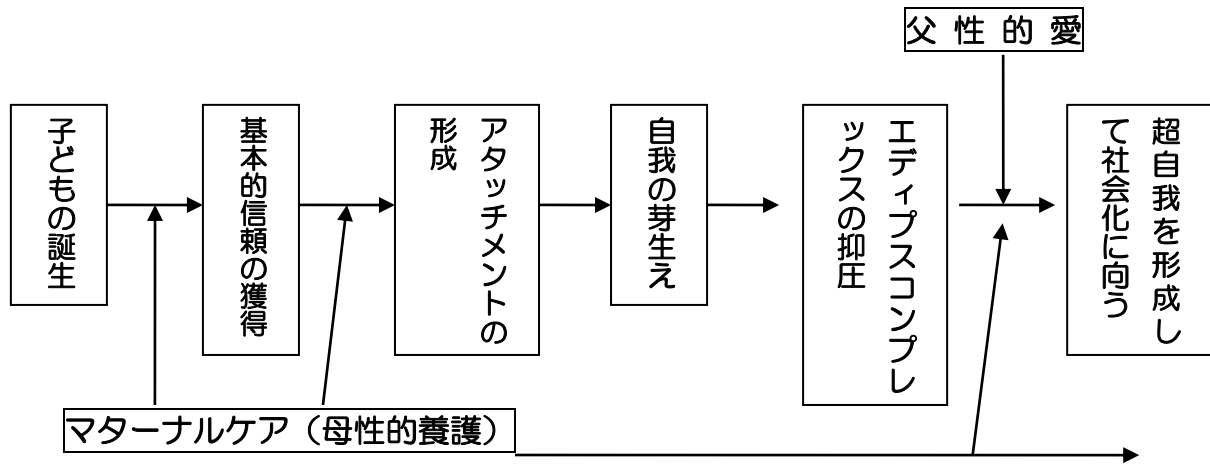
しかしこの手法には、戦前を引き合いに出され国家の責任を地域や家庭に押し付けようとしているとの批判が付きまとう。それは家族がその成員を支援することの意義がちゃんとした理論として位置付けられてないことに原因がある。家庭学はその理論ともなり得る。

『統一思想要綱』においては家庭学に関連する部分は「教育論」と「倫理論」であると思われる。そこでは家庭教育についてはあまり詳細が述べられておらず、学校教育に重点が置かれている。そこで本稿では統一思想における家庭教育のあり方を子どもの社会化に重点をおいて述べてみたい。

世俗の学問ではある程度、子どもの社会化についての理論がまとまってきているように思われる。本稿でそれを概観するが、それをカイン型（世俗的）の家庭教育論とする。そのなかには当然神の心情の教育という概念は含まれないため、アベル型（本来あるべき）の家庭教育論はカイン型に心情教育を加えたものになるものと思われる。その件についてはわずかしか本稿では触れない。

カイン型の家庭教育論を概念化すると次のようになるものと思われる。これにはもちろんいくつもの反論が可能だろうが、筆者がジグムンド・フロイトの理論を前提に試行錯誤

して検討した結果、カイン型一番妥当だと考えるモデルである。



以下にその詳細を説明する。

家族社会学の家族機能概観

スイスの法学者ヨハン・ヤコブ・バッハオーフェン (1815-1887) は家族にも進化の過程があるとし、人類初期の家族形態は「乱婚」であったとした。「母権制時代の後にくるのは父性支配の時代であり、母権制に先行したのは無秩序で自由な性交渉 {乱婚制} である」¹として、人間ではあるものの、家族を形成しない動物同様、人間のオスメスも勝手に性関係を持ち、互いに決まって相手を持たない時期があったという。

その頃は子どもを生む母親が子育て全般に責任を持ったため「母権制社会」であったとした。もちろん、性関係の相手を家族の中に求める近親相姦禁止の原則 (インシスタブー) も存在しない。母権制がキリスト教のような父権制に征服されることによって一夫一婦制が成立したのだという。

家族進化論においてはその後、特定の集団同士による集団婚の時期があり、最終的に今日のような決まった相手を持つ結婚の家族形態になったという。しかし現在では、乱婚、集団婚とも歴史上は存在しなかったとされている。

バッハオーフェンは、弁護士から民俗学者に転向したアメリカのルイス・モルガンの『古代社会』(1877年) から大きな影響を受けた。野蛮⇒未開⇒文明 (キリスト教化) の歴史進歩を想定した上で、その延長線上に史実を当てはめていったのである (モルガンは「未開が文明に先行したことが知られるように、人類のあらゆる部族において、野蛮が未開に先

¹ J.J.バッハオーフェン『母権論 1』岡道男監訳、みすず書房、1991年、36頁

行したことが、いまや信頼しうる証拠にもとづいて主張しうるのである」²という)。

モルガンは家族の進化についても、乱婚⇒血縁家族（三代にも四代にもわたって血縁関係が重なっている家族）⇒プナルア家族（親子・きょうだい間の結婚は禁ずるが、数人のきょうだいと一緒に他人数人の異性と結婚する形態）⇒対偶婚家族（排他的ではない一夫一婦制）⇒家父長制家族⇒一夫一婦制家族、とのパターンを措定していた。

その考え方は実態調査を軽視した結果としてリチャード・ローウィの『原始社会』などに代表される実証主義からの批判に曝されたが、マルクスやエンゲルスにも大きな影響を与えた。

特に史的唯物論における、原始共産社会（共有財産）⇒封建社会（私的財産）⇒資本主義社会（私的財産の極致）⇒社会主義社会（半ば共有財産）⇒共産主義社会（完全な共有財産）とのパターンに典型的に受け継がれことは特筆すべきである。マルクスの史的唯物論とモルガンの乱婚説は根底において繋がっている。しかしマルクスの指摘通り歴史が展開することはなかった。

マードックの核家族理論

乱婚説を排し、核家族が人類にとって普遍的な形態であることを主張したのはアメリカの文化人類学者ジョージ・ピーター・マードック（1897－1985）であった。核家族とは、一組の夫婦とその子どもから成る家族形態のことだが、彼は世界中の 250 種の人間集団における家族を研究し、「核家族は、人間の普遍的な社会集合である」³ことを確信したという。すると一夫多妻制はどうかとの疑問がすぐに湧き上がるだろうが、それはマードックによれば、核家族がいくつか集合したものであって、形態は核家族とかわらないという。「一夫多妻制の場合でも、一般にそれぞれの妻とその子どものためには、別々の部屋とか住居とかが準備されている」⁴という。それをマードックは「複婚家族」と呼んだ。またマードックが提唱するもうひとつの核家族の形態は「拡大家族」である。これは二つ以上の核家族が共同で住むタイプである。

この核家族の機能についてマードックは『社会構造』（1949年）の第一章において分析している。それによると、第一に家族には夫婦間で行われる自由な性交渉があり、これが男女を結婚に結び付ける強力な要素であるとして「性的機能」と呼んだ。ただし夫婦間以外の性交渉を許容する社会も存在するものの、そうでない方が多いという。

第二に男女の能力に応じた性的役割分業が存在するという。男性は力があるところから屋外での経済的役割を果たし、女性は出産育児をしなければならないことから屋内での家事・育児に向く。この男女の役割分業論は「女性を家に縛り付けるもの」としてフェミ

² L.H.モルガン『古代社会 上巻』青山道夫訳、岩波文庫、1958年、21頁

³ G.P.マードック『社会構造』内藤莞爾監訳、神泉社、1978年、24頁

⁴ 同上、25頁

ニズムの批判に曝されているが、マードックはあくまで機能面からそのほうが効率的であり、ひろく世界の核家族において行われていると述べている⁵のである。

第三は性的機能の当然の帰結としての「生殖機能」である。子どもは家族のなかで生んだほうが効率的に育てられる。婚外子は育児負担が大きいことは我々の周辺を見渡してみても了解できる。近年、少子化対策として婚外子に完全な法的地位を与えるべきだとの、マードックの「生殖機能」に反するような主張がある。しかし、婚外子を法的に容認したフランスにおける少年犯罪の多発化は、制度的な家族のなかで育たない子どもの社会化に不安を投げかけていることを忘れてはならない。

そして第四のものとして子どもの社会化である「教育的機能」である。子どもを生んだ父母は社会的責任としてその子を一人前に育てなければならない。子どもの経済的・精神的自立である。こうしてマードックは核家族の機能を四つとしたのであった。

その後、アメリカでは産業化に伴い、家族機能が縮小したとの意見が相次いだ。たとえば育児機能は保育園に、食育機能は外食産業に、老人のケア機能は老人ホームにという具合である。しかしこうした家族機能縮小論にアメリカ機能主義社会学の第一人者タルコット・パーソンズ（1902-1979）は反対し、家族機能は確かに縮小したもののそれほどではないとした。パーソンズが指摘した家族機能は、①子供の第一次的社会化（「子どもが真に自分の生まれついた社会のメンバーとなれるよう行われる基礎的な社会化」⁶、応用的な社会化は学校において行われる）、②成人のパーソナリティの安定化、の二つであった。

フロイトを手がかりとした子どもの社会化理論

今日、子どもが育つ過程については今日、ある程度世俗の学問によって明らかになってきたように思われる。本稿の冒頭において示した図がそれであるが、その内容に関して解説する。

それは最初に母性的愛（子どもを受容する無条件の愛）によって子どもは受容・育成され、その後社会的ルールを身につけるための父性的愛（ある目的を達成したときに愛する条件的愛）を受けて社会化していくものと考えられる。母性、父性という言葉は今日、直ちにフェミニズムからの批判を招く表現となった感があるが、ここではそのことも念頭に置きつつ論を進めていくことにする。

母性愛、父性愛について体系的に述べたのは東京大学の松本茂（1933-）であった。松本は『父性的宗教、母性的宗教』（東京大学出版会 1987年）において母性的愛と父性的愛の概念を使いながら、子どもの成長を、母性的愛の供与⇒基本的信頼の獲得⇒父性的愛の供与⇒超自我の形成⇒社会化に向かう、として描いている。「母親というものは、子があるものとして（筆者注：在るがまま）愛し包む、父親は子があるべきもの（筆者注：ある条件

⁵ 同上、29頁

⁶ T.パーソンズ『家族』橋爪貞雄監訳、黎明書房、2001年、35頁

を達成した場合に)として愛し導く」⁷として、その典型例を手塚治の漫画「どろろ」を例として引いている。

どろろの例えの舞台設定は戦国時代。底冷えのする京都の冬である。どろろの父親は落ちぶれ果て、死ぬほど空腹であっても武士の誇りは守るべきであることを理解させようと、公家がどろろのためにと放り投げたたったひとつの饅頭を拒否。父親が「非礼」と公家を責めたことから起こった諍いのためにどろろの目の前で公家に斬られて死んでいく。それとは対照的にどろろの空腹を満たすために自分の手で煮えたぎる粥を汲み、さらには雪降る夜にどろろを寒さから守ろうとして命を賭して自分の体で息子を雪から守った母親の姿を、松本は父性愛、母性愛の典型例として紹介している。⁸

*母性的愛に関して

・エリクソンの基本的信頼

アメリカの心理学者エリク・エリクソン(1902-1994)は、人間の成長段階をライフサイクルとして捉え、それぞれを乳児期、幼児期初期、遊戯期、学童期、青年期、前成人期、成人期、老年期の八つ⁹に分け、晩年に老年期を二分して合計九つとした。そのなかで有名なものは青年期のアイデンティ(自我同一性)概念の提示、あるいはアイデンティ確立の危機の時期としての青年期問題であった。

しかしエリクソンは乳児期の心理についても興味深い説を唱えている。それは、乳児は生後一年くらいを目途に「基本的信頼」を形成するというものである。これは、乳児と母親とが授乳を通じて築き上げるヒトを信頼する基本的な感情とされる。この感情がうまく育たないと、基本的にヒトを信頼できないためその乳児は成長した後、社会生活がうまく過ごせない可能性がある。

イギリスの動物学者アードルフ・ポルトマンが、人間は「生理的早産」である(動物に比べると立ち上がる時期が出産一年後であるところからそう表現した)とし「新生児に対する集団の助力、すなわち愛情をもった世話が確かなにされないと、姿勢、会話、精神生活、思考が、完全な人間性にみちびく軌道から外れていってしまう」¹⁰と述べたように、人間は人間によって育成されなければ人間にならない。その、人間になるための原点をエリクソンは基本的信頼と命名したのであった。

基本的信頼の説明は『精神分析事典』に詳しい。それによると「乳幼児は、養育者との関係で基本的信頼と基本的不信という拮抗する要素を内在化していくが、基本的信頼が基

⁷ 松本滋『父性的宗教、母性的宗教』東京大学出版会、1987年、15頁

⁸ 同上、15-18頁

⁹ E.H.エリクソン他『ライフサイクル、その完結』村瀬孝雄監訳、みすず書房、2001年、73頁

¹⁰ アードルフ・ポルトマン『生物学から人間学へ』八杉龍一訳、思索社、昭和56年、96頁

本的不信より優位であることが精神的健康さの基盤となる。このことは、小児分裂病や精神分裂病などのような重い精神病理で基本的不信が顕著であることにも示されている¹¹という。

エリクソンは共産主義者を排除しようとしたマッカーシズム（1950年にマッカシー米上院議員が発案）に反対して UCLA バークレー校を退職、アメリカ政府と対立する経歴を持つ。しかしながら、基本的信頼に関しては宗教的信念が大きな肯定的影響を及ぼすとの視点も提供している。つまり「自分は宗教を持っているという人は誰でも、宗教から信仰を引き出さなければならない。そして、この信仰は基本的信頼という形で赤ん坊に伝達される。また自分には宗教は必要ないと主張する人々は、このような基本的信頼をどこかほかのところから引き出してこなければならない¹²と述べているのが注目される。

・ボウルビーのアタッチメントの形成

乳幼児期の重要性を強調したもう一人はイギリスの児童精神科医ジョン・ボウルビー（1907-1990）であった。時期的にはエリクソンより先である。彼は 1950 年に WHO（世界保健機構）の要請を受けてイタリアの孤児院（児童養護施設）における問題（ホスピタリズム・施設病：孤児院に収容されている児童に起こりがちだと思われていた身体的・精神的問題）を調査、1951年に「乳幼児と母親（あるいは永続的な母親代理者）との人間関係が、親密で、継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされているような状態が精神衛生の根本である¹³との結論を公表した。母親による丁寧なケアが行われずアタッチメントが形成されない場合、児童に心理的・身体的問題が発生するとして、子どもと母親との本質的な結びつきに関する研究の重要性を提起したのである。

アタッチメントは「愛着」と訳され、子どもが身近な大人（通常は母親）との間に形成する情愛の絆とされる。当時の孤児院（現在は児童養護施設：親が育てない児童を入所させて養育する施設。昔の孤児院時代は親との死別で入所したが、現在は入所児童の 8 割の親は生存しているとされる）においては、ケアが十分に行われずしかも大人数の収容であったため、そこで児童がアタッチメントを形成するのは難しかったとされる。そのため、ボウルビーの指摘する「母性的養育の剥奪」(maternal deprivation) といった事態が発生し、児童に様々な問題が起こった。

ボウルビーの孤児院での調査によると、母性的養育が剥奪されると「他者に対して強い欲求を示すが、もしもその欲求が満たされないと、不安と怒りを示しやすい。…また彼らは無感動的な精神病的性格者に認められるような対人関係能力の欠如という障害を持って

11 一丸藤太郎「基本的信頼」『精神分析事典』小此木啓吾編集代表、岩崎学術出版社、2002年、86-87頁

12 E.H.エリクソン『自我同一性』小此木啓吾訳編、誠信書房、1973年、73頁

13 J.ボウルビー『母子関係の理論Ⅱ』黒田実朗監訳、岩崎学術出版社、1977年、iii頁

いる」¹⁴ようになるという。ボウルビーは前者のような症状を神経症患者と同じと表現している。

こうしたこともあってか、後にボウルビーは批判されることになる。児童養護施設で育った児童は、すべて犯罪者や精神病患者になると指摘していると誤解され、施設児への偏見を生むとされたからであった。

しかしこれはやはり誤解である。ボウルビーの主張したかったことは、色々な要因と比較しても「母性的人物の存否が、子どもの情緒を左右する最大の決定要因であることは明らかである」¹⁵ということであった。ボウルビーはこれを、後に婉曲な表現方法に変え、「私が便宜上、愛着理論と呼んでいるのは、強い情緒的結びつきを特定の相手に対して起こすという人間の傾向の一つの概念化であり、また、望まざる別離や喪失によって引きこされる不安、怒り、憂うつ、情緒的離脱といった情緒的苦悩や人格障害のさまざまな形態を説明する一つの方法でもあります」¹⁶と述べている。

またボウルビーは、幼児期の母子分離が生涯にわたって深刻な影響を及ぼすとのやや決定論的な初期の主張も緩和し、アタッチメントは生涯の幾つかの場面において再構成できるとも述べている。「初期幼児期において特に顕著であるとは言え、愛着行動はそれこそゆりかごから墓場までの人間存在を特徴づけるものです。……年をとるにつれてこれらの行動があらわれる頻度と強さは減少していきます。とは言え、これらの行動は人間の行動機能の大切な一部分でありつづけます」¹⁷。

現在、ボウルビーのアタッチメント理論が再注目されている背景には、増加する虐待の問題がある。虐待は、幼少時に不可欠な親との親密な関係が築けないばかりか、その親から身体的暴力、精神的暴力、時に性的暴力、または養育の拒否（ネグレクト）を受けることになるため、家庭内で起こる母性的養育の剥奪現象と理解されている。被虐待児はかつての孤児院におけるホスピタリズム（施設病：心理的・身体的問題）のような症状を呈することがある。被虐待児は年齢のわりに小さい発育の不良、心理的発達の遅滞（たとえば排便がトイレで出来ない、言葉がうまく話せない等）の事例が報告されている。

なお愛着理論に関して現在、「三歳児神話」をめぐるフェミニストと保守派との論争がある。フェミニストらは「三歳児神話」は、子どもは三歳まで手元で育てた方がいいため女性は仕事をせずに専業主婦であるべきだと理解し、これを女性を家に押し込めておこうとする封建的思想であるとする。一方の保守派は三歳までは家庭で養育するのが子どもにとって必要だとする。

しかし愛着理論からすれば、幼児期に特定の大人（通常は母親）との間にアタッチメン

¹⁴ J.ボウルビー、同上 iv 頁

¹⁵ 同上 v 頁

¹⁶ J.ボウルビー『ボウルビー母子関係入門』作田勉監訳、星和書店、1981年、179頁

¹⁷ 同上、183頁

トが形成されれば子どもはそれを手がかりに発達していく。その際に母親が専業主婦であるのか働く女性であるのかは二次的なことのように思われる。仕事をこなし保育所を利用しながらアタッチメントを形成する母親もいるだろうし、専業主婦でありながらもそれを形成できない女性もいるだろう。また夫が家事・育児に協力的であるかどうかということによってもアタッチメントの形成は大きく影響される。しかしこの問題に本稿では深く立ち入らず、別の機会に譲りたい。

* 父性的愛

・フロイトの超自我の形成

初めて無意識を学問の対象とし心理学を始めたジグムンド・フロイト（1856-1939）が活躍したのは 20 世紀初頭のオーストリアであった。今日では多くの学者がフロイトを批判するものの、彼の超自我の概念は子どもの社会化にとって重要な概念であると思う。

フロイトを父性的愛の紹介者と述ぶのも間違っていない。この点に関して、日本におけるフロイト研究の大家である小此木啓吾は次のように述べる。「フロイトの思想は、父性優位の思想である。フロイトは、人類はかつて母権制であったが、やがては父権制の段階に進歩したと言う。この母性から父性への進歩こそ、知的優位のフロイト思想の拠り所である」¹⁸。

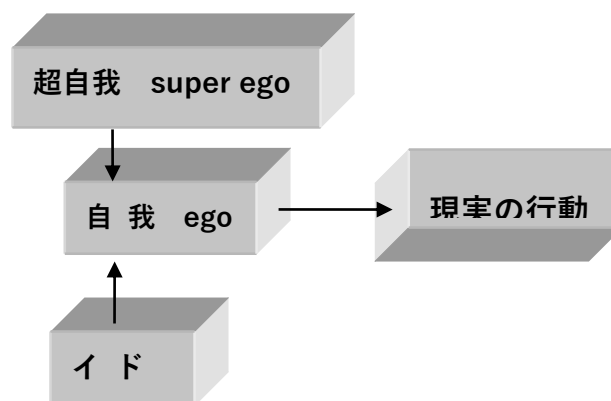
フロイトはモーセに関する論文（「モーセ像」「モーセという男と一神教」）も書いている。これはフロイトがモーセを理想の父親像と見ているものであると小此木は指摘する。イタリアにあるミケランジェロのモーセ像は通常、イスラエルの民の不信仰に怒って十戒の石版を割るモーセ像とされるが、これをフロイトは、その怒りと闘いそれを乗り越えたモーセであると再解釈したとも指摘する¹⁹。

フロイトが超自我の概念を述べたのは、彼の精神力動論においてであった。我々の心の構造は次のようであるという。

超自我：自我を社会的ルールに従わせようとする力（父親のイメージ）

自我：通常、我々が自分と
思っている心の領域

イド：本能（リビドー、性欲）



我々の心の構造は、通常、我々が自分と
思っている領域があるという。それをフロイト

¹⁸ 小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』講談社現代新書、2002年、241頁

¹⁹ 同上、244頁

は「自我」(ego)と呼ぶ。しかし自我は絶えず、「イド」からの支配を受ける可能性がある。イドとはフランス語の「それ」(英語の it) という意味であるが、イドは本能であつたりまた時にフロイトは性欲とも呼んだりする。

しかし自我が本能や性欲のままに行動すればどうなるであろうか。人間の行動は動物的になるばかりか、性欲のままであれば時に性犯罪をおかすことにもなる。そこで、自我を社会的ルールに従わせようとする力が必要になる。これをフロイトは「超自我」と呼んだ。超自我は父親のイメージという。超自我の形成にはエディプス・コンプレックスの抑圧が必要だとフロイトは強調するのである。

フロイトの発達論によると、人間(特に男性)は性的に五段階の発達段階を経験する。最初は授乳によって唇に快感を感じる口唇期、次に排便を正しく行うことで快感を得る肛門期、次に男の子が自分の性器に興味を持つ男根期。その際、男の子は同性である父親を排除し異性である母親を独占したいというエディプス・コンプレックスを持つという。

エディプス・コンプレックスはもともとギリシャ神話のオイディプス王の物語りから考案された。それはテーベ国の国王と王妃が信託に反して男の子オイディプスを孕んでしまった。その子は国を滅ぼすとの予言があつたため、遠い外国に捨てられた。しかし後年、成長して勇者となつたオイディプスはテーベ国にそれとは知らずに舞い戻り、道を譲る譲らないの騒動で間違えて国王を殺してしまった。もちろんオイディプスはそれが父親であるとは知らなかつた。その後、怪物スフィンクスの謎を解いたオイディプスはテーベ国の王となり、王妃を妻に娶つた。その王妃こそ母親であつたのである。後にすべての事情を知つたオイディプスは自ら目を刺し盲人となつて暮らしたという悲劇である。

エディプス・コンプレックスを持つた男の子は父親を排除したいと思う。しかし父親は力が強く、しかも母親から支持もされてもいる。男の子は仕方なくエディプス・コンプレックスを自らの無意識の中に抑圧せざるを得ないのである。この抑圧の過程で超自我は生じるとフロイトはいう。つまり男の子が初めて従う社会的ルールがエディプス・コンプレックスの抑圧なのである。

以上のことをフロイトは次のように述べている。

男子の場合は簡略化すれば次のような展開になる。男の子は…やがて母親に対する性的欲望が強くなり、父親がこの欲望に対する障害であることが感知されるようになると、ここにエディプスコンプレックスが発生することになる。そうすると父-同一化は今や、敵対的なトーンを帯び、父親を排除し、自分が母親にとっての父親になり代わりたいという欲望に向き変わる。…やがてこのエディプスコンプレックスは瓦解することになるが、…ともかくこうして、エディプスコンプレックスの没落を通して、男児の性格のなかに一般に男性性が強まることになると考えることができよう。…こうして生じた自我変容は、おのれの特権的地位を保持しつつ、自我理想ないし超自我として、それ以外の自我の内容に対立することに

なるのである。…自我理想がこうした二重の相貌をもっているのは、かつて自我理想がエディプスコンプレックスの抑圧に力を尽くしたという事実、いや逆に、この急変のせいではじめて生まれ出たという事実由来する。エディプスコンプレックスを抑圧するのは、なまなかのことでなかったようである。²⁰

フロイトが述べたエディプスコンプレックスの抑圧による超自我の形成との考えは、人間墮落を性の誤用と理解している『統一原理』における人間復帰のための蕩滅条件に近いものと思われ興味深い。

同性の親を排除して異性の親との性的合一を思慕するというパターンは『統一原理』の指摘する人類始祖の墮落パターンと同一である。この誘惑に打ち勝って（抑圧して）初めて人間は、社会的ルールに従う第一歩を踏み出すというのは極めて象徴的なストーリーと言える。

父性・母性理論が逆転した研究史

以上、述べてきた通り、子どもの社会化には母性・父性の役割が極めて重要である。この母性・父性の愛を子どもに与える順序が逆転すると、子どもは決して順調には育たない。父性愛が先行すれば子どもは萎縮してしまう。

しかし心理学における研究の順序が逆であったことは興味深い。つまり 20 世紀初頭、フロイトによって超自我の役割が強調されたことは、フロイトが超自我を父親のイメージだとしたことからわかるように父性愛の強調であった。先に小此木が指摘した通りである。しかし、フロイトは超自我の力があまりに強すぎると様々な心理的問題を抱えるとも指摘した。自我を絶えず刺激するイド（本能・性欲）、つまり欲望とのバランスが精神衛生には大切であるという。

その点は、戦後の研究が重点を置いたところである。エリック・エリクソン（1902-1994）の子どもの「基本的信頼」、ジョン・ボウルビー（1907-1990）の「アタッチメント」の形成などはまさに母性愛的な側面であった。

この父性・母性の研究史の逆転は、極めてキリスト教的であると筆者は考えている。先に引用した小此木のフロイト解釈によると、西洋の優位性は母権性を圧倒した父権制の勝利にあるとフロイトは理解していたという。その点を少し考えてみよう。

メソポタミアにおいて後発の一神教としてスタートした古代ユダヤ教は、先発の周辺宗教に対して優位であることを示さなければならなかった。中東地域の多くの宗教は農業生産の豊饒を願って、母性的な要素を多分に含んでいたのである。その最たるものが宗教行事として行われた売春であった。人間の出産を穀物の豊作に例え、神殿娼婦との性関係を

²⁰ S.フロイト「自我とエス」『フロイト全集 18 巻』本間直樹他訳、岩波書店、2007 年、27-31 頁

自分への豊作の、神による約束と解釈したのであった。その他にも性的宗教儀式とよばれるものが多かった。

この思想を墮落的であると激しく批判したものが、創世記第三章の失楽園物語であった。アメリカ統一新学校のアンドリュー・ウィルソン教授によると、中東地域において豊饒のシンボルとみなされていた蛇と女性イブの性的交流こそ人間が神と断絶する原因であったと古代ユダヤ教は強調したのである²¹。

理論的には母性を排除したユダヤ教であったが、実生活ではそれほどではなかった。結婚を否定し独身主義を打ち立てたわけではなかったのである。

しかしユダヤ教の伝統の上に建ったキリスト教はイエス当時のエッセネ派以来、独身主義を強調することになった。結婚にも否定的で人間の性関係そのものを嫌悪したのである。母性の徹底した排除であった。

パウロは独身であることを奨め、初代教父たちのなかには性欲との闘いの末にテリトリアヌス（182?-251年）のように去勢する者まで登場した。またアウグスチヌスは明確に性欲が原罪であると言い切ったのであった。神は男性であり、三位一体の神の各要素（神、イエス、聖霊）もすべて男性である。キリスト教文化圏では父-息子の関係しか有意に語られない。

カトリックにおいて聖職者は独身であることが義務付けられた。信徒には結婚が許されたものの、独身の奨めは行われた。例外的にマリア信仰が成立したことは信徒にとって救いであった。教団全体がゴツゴツした男性主義に覆われることなく、一筋の女性的な柔らかさが生まれたからである。

一方プロテスタントはマリア信仰を排除した。一種の偶像だと断じ、カトリックの腐敗の一因だと見なしたのであった。ところが、牧師の妻帯は許可した。新旧とも絶妙なバランスの取り方である。

そういう意味において小此木のフロイト解釈は的を得ていると言える。西洋社会は既存の母権制を墮落的と排撃し、その後打ち立てられたユダヤ・キリスト教の伝統の上に立っているからにはほかならない。そして第二次大戦後、西洋優先主義がひとつの傲慢な態度として見直される過程において、母性の見直しも進み、母子関係を再検討するようになったと解釈できるのである（具体的には母子関係が重要であるとの乳幼児の研究結果に基づいたことは言うまでもない）。

この徹底した女性性の排除が、キリスト教圏において夫婦論が成立しなかった原因である。愛は神と人間、せいぜい人間の同性同士の友情（友愛）にまでしか拡大できなかった原因であった。詳細は「夫婦の愛論」において述べたい。

²¹ "The Sexual Interpretation of the Human Fall", *Unification Theology*, Andrew Wilson, Unification Theological Seminary, 1998

統一思想における家族の機能

さて統一思想において家族の機能はどのように理解されているのであろうか。そのためには統一思想における家族の意義を考えてみなければならない。

統一思想において家族とは、第一義的に神の愛を体恤（体験し血肉とすること）する場所として規定されている。『統一思想要綱』（以下、『要綱』）では「神の愛が完全に実現するためには家庭的四位基台が必要となる。ゆえに神の愛は、現実的には家庭的四位基台（神、父、母、子女の四位置）を通じて分性的愛（分性愛）として、すなわち「父母の愛」、「夫婦の愛」、「子女の愛」として現れる」²²とされる。この愛を人間が経験する順にさらに細分化すれば、「子女の愛」（子どもとして親の愛を受けること）「きょうだいの愛」²³「夫婦の愛」「父母の愛」として表現される。

この四つの愛をひとつの家庭で体験するには、その家庭が三世代家族でなければならない。自分が生まれた家族を家族社会学では「定位家族」と呼ぶが、そこでは子どもの立場で両親によって育ててもらえるため「子女の愛」と「きょうだいの愛」を体恤することができる。また、自分が結婚し形成する家族を「生殖家族」と定義するが、そこでは今度は自分が親の立場で子どもを生み育てる行為がなされるため「夫婦の愛」と「父母の愛」を体恤することになる。

四つの愛を同時系列的に体恤するには、この定位家族と生殖家族が同時に存在する三世代家族においてほかにない。この三世代家族を家族社会学では「拡大家族」と呼び、また定位家族と生殖家族がすぐ近くに住み合えば「修正拡大家族」と言う。

少し寄り道して考えてみると、統一思想の愛を四つに分類する手法は極めてキリスト教的である。「神は愛である」とヨハネの福音書において記され、それ以来、キリスト教の神は「愛の神」として伝播されるようになった。しかし、その愛の概念はかなり曖昧なものであったため、後代の研究者らは神の愛を詳しく説明しようと努力した。

その結末として例えば手軽なインターネット版ウィキペディア（事典）の「愛」の項目での「キリスト教での愛」には、エロス（肉体的愛）、ストルゲー（親子や子弟間などの従う愛）、フィーリア（友情愛）、アガペー（無償の愛）であると紹介している。

そのなかでもアガペーは、初代キリスト教学者らが神の愛を表現しようとした際、愛を意味する複数のギリシャ語のなかから最も相応しいとして採用したものであった。イエスの十字架の死がすべての人々の贖罪になることを強調し、「無償の愛」を意味するアガペーの概念で説明したのであった。

一方、エロスについては多少の注釈が必要である。通常エロスは対象のなかに愛を求めるものであり同時に性愛も意味したため、アガペーの反対概念として使用されることが多

²² 『新版 統一思想要綱』統一思想研究院、2000年、「倫理論」の項 387頁

²³ 三対象の愛に「きょうだいの愛」が追加される点については『統一思想要綱の』付録 734頁以下の「四大心情圏」を参照。なお「きょうだい」と表記すると兄弟姉妹のことを指す。

かった。そのため、これをキリスト教の愛のひとつとして理解するためにはウィキペディアの訳ではなく、『キリスト教組織神学事典』による「神を慕う愛」と訳した「慕情」²⁴とする必要があるだろう。ちなみに同事典はストルゲーを神の愛の中に含めていない。

また熱心な英国教会の信徒であり放送作家として著名なアイルランドの C.S.レウィス (1898-1963) は『四つの愛』(英語版"The Four Loves"1960年)を著している。彼はその著書のなかでキリストの愛を **Affection** (愛情)、**Friendship** (友愛)、**Eros** (愛している状態)、**Caritas** (キリスト教的同胞愛) に分類し神の愛を説明しようとした。ここでもエロスは肉体的愛とはせずに愛を四分類している。

本題に戻って、統一思想における愛を考えてみる。そこでは四つの愛を体恤できる環境を家庭と限定している。愛を体恤したければ家庭を形成しなければならない。逆に述べれば、家庭は愛を体恤する場所であるため、これが家庭の機能の最も大事なものとならざるを得ない。

つまり統一思想における家庭の機能とは、第一に愛(四つの愛)の体恤が最優先されることになる。これをマードックの分類を借りて解釈してみる。

第一にマードックの家族機能は「性的機能」であった。いくら浮気が一般化している世の中であるとはいえ、依然として法的には妥当性がある指摘といえる。これは統一思想的に言えば、「夫婦の愛」を意味し、性愛論としても展開できる。

第二の家族機能をマードックは「経済的機能」とした。彼はその際、男女の役割分担を固定化したため、後にフェミニズム等の痛烈な批判を浴びることになる。統一思想では男性が主体、女性が対象との明確な位置関係があるものの、一旦この位置が決定されて授受作用が始まれば、位置交換が可能のため、社会的資源獲得のための男女の位置関係は固定される必要がない。つまり夫が家事をし妻が仕事に専念し、主夫があってもいいことになる。これは「夫婦の愛」情の形の問題であると考えられるため、「夫婦の愛」に含まれるものと考えられる。

第三は「生殖的機能」である。これは子どもを生むことであるため、これも「夫婦の愛」に属するだろう。第四の「教育的機能」は子どもを育てる機能であるため、「父母の愛」に相当する。

こうしてマードックの四機能説を統一思想の四つの愛で整理してみると、マードックの家族機能は「夫婦の愛」と「父母の愛」の一部のみしかカバーしていないことがわかる。そのほかに「子女の愛」と「きょうだいの愛」についてマードックは触れていないことになる。

統一思想における家庭の機能とは、神の愛である①「四つの愛体恤機能」、以下にはそのための②性的機能、③生殖機能、④教育的機能、⑤経済的機能の五つに分けて考えること

²⁴ 『キリスト教組織神学事典』東京神学大学神学会、教文館、1972年、7頁

が出来そうである。

統一思想における子女の社会化

統一思想における子女の社会化も世俗的（カイン型）のそれをやや近いものと思われる。生後、母親との間にアタッチメントを形成して基本的信頼を得て、自我を形成して社会的ルールにしたがいつつ自己を実現する方向に進むものと考えられる。

自己実現とは、アメリカの心理学者アブラハム・マズロー（1908-1970年）らが考案したもので、基本的欲求が充足されれば人間は本来的自己を実現するという考え方である。

その欲求とは低い次元のものから「生理的欲求」-生命維持のための食欲・性欲・睡眠欲等の本能的・根源的な欲求、「安全の欲求」-衣類・住居など、安定・安全な状態を得ようとする欲求、「所属と愛の欲求」-集団に属したい、誰かに愛されたいといった欲求、「承認の欲求」-自分が集団から価値ある存在と認められ、尊敬されることを求める欲求、そして「自己実現の欲求」-自分の能力・可能性を發揮し、創作的活動や自己の成長を図りたいと思う欲求、であるという。

しかし統一思想において子女を本来の自己に導くものは、マズローの基本的欲求の充足やフロイトのエディプスコンプレックスの抑圧による超自我の形成ではないように思われる。

統一運動の創始者である文鮮明師は、その役割は「良心」よって行われると指摘、次のよう述べている。

人間を、御自身の子女として創造され、万物の霊長として立てられた神様は、人間に「良心」という、最高、最善の贈り物を下さいました。…良心の作用のなかで、最高、最上のもの機能が正に、真の父母、真の師、真の主人の役割の機能です。…人間の人生を指導し監視する本源的な機能を、良心に伝授して下さったからです。²⁵

統一思想において子女を社会的ルールにしたがって自己実現させる役割を持つ心的要素は「良心」であると考えられる。そのため、両親が子女の良心を規範的父母愛によって育て、その良心が子女を社会的ルールにしたがいつつも自己を実現することになると考えられる。

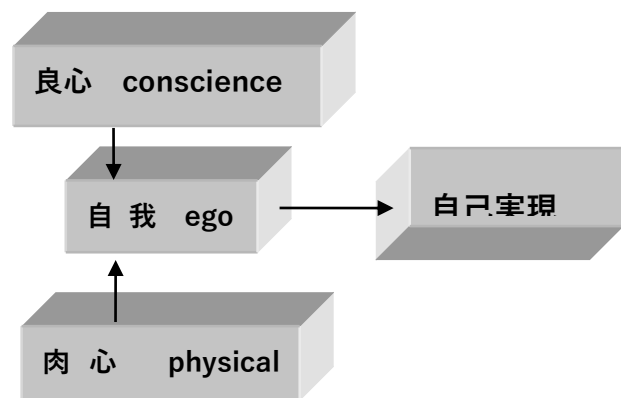
しかし規範教育を行う際、父母の愛情が前提でなければ子女は規範にしたがうことは無い。その結果フロイトの心的構造論は次のように修正することが出来るものと思われる。

²⁵ 『平和訓経』「平和メッセージ 15 摂理的観点から見た三大主体思想」世界平和統一家庭連合、2007年、pp295-296

良心：自我を社会的ルールにしたがわせ
自己実現させ力（規範的父母の愛）

自我：通常、我々が自分と思っている
心の領域

肉心：肉体を維持し生殖を行う



ここでフロイトの「イド」を「肉心」としたが、肉心とは、『原理講論』によれば「肉身の心に相当する部分」であるという。つまり肉体を維持するための本能的な部分であると考えられる。

そこには肉体の保存と同時に、種の保存を司る性も含まれるであろう。性は統一思想においては生涯にわたって抑圧すべきものではなく、結婚までの期限付きの制限の対象に過ぎない。結婚後は、むしろ開花させるべきものである。

そうした意味において、イドを否定的に捕らえたフロイトとは異なり、性を期限付きの制限の対象とする「肉心」との位置付けにした。

また「規範的父母の愛」について説明する。規範教育について『要綱』では、家庭完成の教育ではあるものの「家庭における父母と子女の本然のあり方や兄弟姉妹のあり方」²⁶も含むものとしている。さらに規範教育は人間がロゴスの存在になるように、「すなわち天道に従うようにするための教育」²⁷でもあるという。天道と社会的ルールには若干の違いもあるだろうが、ほぼ社会的ルールにしたがうような教育を与えることと同義である。

また『要綱』においては父性が主体で母性が対象という関係が成立している。しかし主体と対象は授受作用を通じて一体化すれば互いにその位置を入れ変えるとも述べる。そういう視点から見れば、母性愛も父性愛も夫婦の協力の上に発揮されるものと考えられる。

たとえば、子女の乳児期に子どもに接するのは母親だが、その背後には母親への父親の支援がなければならない。具体的には父親が買い物、洗濯、時には炊事を行う、あるいは疲れた妻（母）の身体をマッサージするという具合である。そうすれば、母親も子どもへの愛情が増すことは間違いない。夫の支援を肌身で感じ、孤立した育児にはならないからである。

するとアタッチメントと基本的信頼を形成する母性的愛（母性的養護）を、夫婦が協力して行う子どもに対する無条件の愛情と考えれば、「受容的父母愛」と命名出来るのではないか。

また父性的愛においては、子どもの自我が成長し、時には自己主張が過剰となってわが

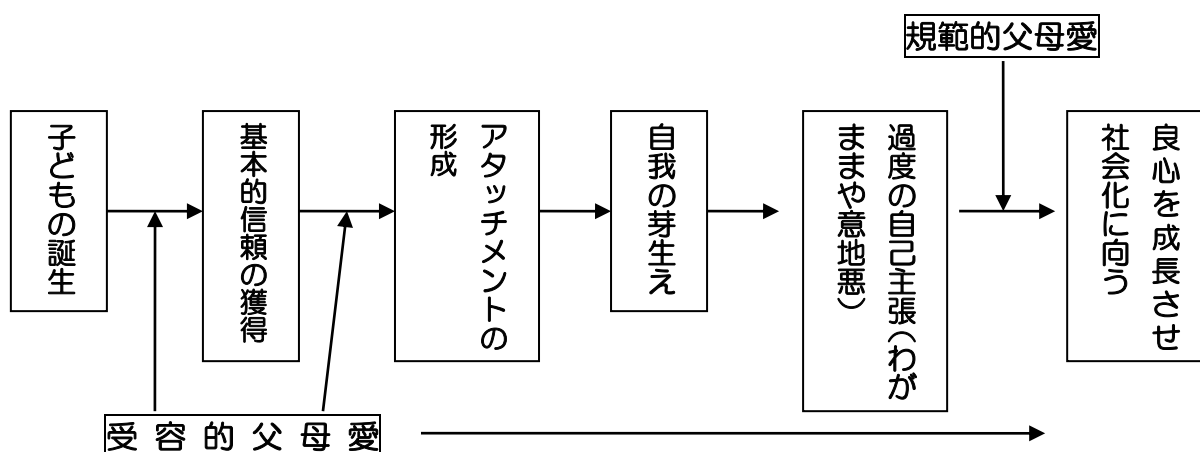
²⁶ 『要綱』 360 頁

²⁷ 『要綱』 361 頁

ママや友達への意地悪などに発展した場合、親は子どもへ社会的ルールの教授をしなければならなくなる。たとえば父親が子どもを叱ったときに、それを子どもに受け容れてもらうには母親の諭しが必要である。あるいは母親が叱った場合は父親の諭し、というパターンである。社会的ルールの教授も父母の協力のもとに行われるのが現実的には多い。したがって父性愛を「規範的父母愛」と言い換えることができる。

母性的愛を「受容的父母愛」に、父性的愛を「規範的父母愛」と言い換えればフェミニズムからの批判にも耐えられ、より事の本質に迫れるように思われる。

フェミニストは父性・母性との明確な区分を否定的に捕らえるが、父母的愛は、父性が主体、母性が対象との位置関係さえ定まって授受作用が始まれば、互いに位置を交換し合い渾然一体化するとの関係にある。そこにはもはや明確な区分はなく、父母一体の境地が現出するのである。以上を踏まえて冒頭の子どもの社会化概念図を修正すれば次のようになる。



「夫婦の愛」論への入り口として

本稿では「子女の愛」のみを検討することとなったが、「きょうだい愛」、「夫婦の愛」、「父母の愛」については稿をあらためて検討したい。たとえば「夫婦の愛」については、いわゆる性愛の問題も含むことになるが、先に触れたように性愛は従来キリスト教では一種のタブーであった。また仏教では密教として、性愛による悟りの境地の作法というものもあったが、それらは「夫婦の愛」において本格的に論議されることになる。

子女を社会化するために「受容的父母愛」「規範的父母愛」を子女に与えるためには、父母間の意志の疎通が順調でなければならない。夫婦関係がギクシャクしては子女の社会化がうまくいくはずがない。子女の社会化とは実は夫婦関係の安定の上に成立するものにほかならないのである。

それでは夫婦関係が安定する大きな要因とは何か。それは互いの信頼関係の構築であり、日常の良好なコミュニケーションから始まり、結局、結婚観というものが重要になるもの

と考えられる。互いに相手を尊敬する。そのためには互いに神的価値があると信じることが出来ればそれに越したことはない。

その点、『原理講論』は神を陰陽の二性性相として理解し、その世界的展開が男女であるため、男性は神の陽性を女性は神の陰性を著し、男女の結婚は神の相似形になることであると位置付けている。人間が完成するための結婚すると主張するのである。

さらに円満な夫婦関係のその核心は浮気をしないことに突き当たるだろう。元来、人間の性関係とは「秘め事」であり、第三者には閉じら、かつ第三者が介在できない行為である。

それは人間の愛情の関係が一对一であることからわかる。たとえば恋愛において二股をかけるのは相手に対する裏切り行為であり、今風の若者の倫理観においてさえ許されない。それに近い考えかたを社会学は提示している。『新社会学辞典』は、家族が成立するための条件として次のような指摘を行っている。

第一の前提は、生殖における分業を核として展開される性的分業であって、男女はこのゆえに相互依存の関係におかれ、性的結合を維持する。第二の前提は、性的結合の相手方を自己が生まれ育った家族のなかから求めることを禁ずる近親相姦のタブーである。…社会のなかに家族が解消してしまわない保証はインセスト・タブーから由来するといえる。第三の前提は、子の母の夫が子の父であり、そうした父をもつだけが社会によってよって正当な子と認められるという嫡出の原理である。²⁸

家族成立の第一の前提である男女の性的役割分業はもっともフェミニストが嫌う点である。男性は家の外でお金を稼ぎ、女性は家内で家事・育児に勤しむとの女性を家内に閉じ込める封建的思想であるという。このフェミニストの主張にも「五分の魂」があると筆者は考える。女性を家庭に閉じ込め、男性に服従を強いるいわゆる封建的な女性観は統一思想的ではないと理解しているからだ。

先にも指摘した通り男女の性的役割分業を、男女間の役割の分業と理解し、経済的機能、家事・育児機能を夫婦でどのように分担しあってもいいものと解釈すればいい。夫婦で得意な分野に特化する、または時期に応じて特化するのである。

第二と第三の前提は性に関する事柄である。第二の前提はインセストタブーが家庭内に存在すること。さらに第三の前提は妻の子どもが必ず夫の子どもであることとは、妻の浮気による妊娠を禁じている。

この家族社会学の家族成立のための条件が不評なのは、浮気の禁止を妻にだけ求めていると考えられる点だ。この点、極めて男女不平等的になっている。

²⁸ 森岡清美、他編『新社会学辞典』有斐閣、1993年、177頁

統一思想において浮気は男女、平等に禁じられる。それは便宜上だけではなく極めて厳密に禁じられるのである。子女の社会化のためというだけでなく、人間として破ってはならないこととして戒められているのである。

実は、統一思想における子女の社会化理論には、この夫婦としての規範（互いの神的価値のある物としての尊敬、浮気・不倫の厳密な禁止）を守ることが大前提となっているのである。この点が、既成の親の子に対する在り方等のコーチングや親学との決定的な違いになっているものと思われる。

最後に

当初は本稿に最近の脳科学の成果を取り入れ、幼少期の脳内ネットワークの形成と母性のケアの関係についても述べるつもりであったが、そこまでは触れることが出来なかった。次回の課題としたい。

また、家庭学の政策論について簡単に触れておくと、その原型は「雇用保険の給付」をモデルとして考えることが出来る。雇用保険は、給付の度に執拗に講習会がある。雇用保険の意義と不正給付についての注意である。受給者にとっては実にはいやなもので、あたかも受給者が不正受給をしているかのような扱いをするからだ。そして官吏の高飛車な態度、である。

しかしこの仕組みは、制度を健全に運用する点においては優れていると謂わざるを得ない。運用する官吏の態度に問題は多いことも言うまでもない。

これを家庭学の政策論に応用するとすれば、家庭学やそれをもとにした親学の内容を以下の機会毎に、たびたび講習することである。これを家庭カウンセリングとセットで行う。この講習の受講は義務とし、受講したものに給付金を給付するよう条例を制定する。この政策は生殖家庭が発生するところから終息するところまでのライフサイクルに対応させることとする。

- ① 結婚届け⇒結婚祝い金の給付。結婚の意義について、男女の協力の必要性
- ② 出生届け⇒出生祝い金の給付。子どもの育ちについて。虐待の問題について
- ③ 乳幼児健診⇒子育て相談
- ④ 児童手当の支給⇒児童手当、児童扶養手当、特別児童扶養手当の支給の際の相談と受講
- ⑤ 生活保護給付の際の受講

最後に、「家庭学」を本格化させるには「家庭学宣言」のようなものが必要だと思われる。これは鹿児島県の河野恒心先生のご提言によるものであるが、家庭学が家族社会学とぶつかることは目に見えている。その際、正面からの論争は意味があるかもしれないが、運動を

優先させ現状を打開するには「宣言」のようなものを発して、家庭学の立場をあらかじめ明示したほうが生産的であると考えられる。それは、次のように項目が必要だろう。

「家庭学宣言」の骨子

- ①家庭の現状：弱体化の進展
- ②将来への危惧
- ③危機回避の方策